

日本中國學會報 第七十一集
二〇一九年十月十二日 發行 拔刷

『守先閣藏書志』と陸心源の藏書目錄編纂について

劉斯倫

『守先閣藏書志』と陸心源の藏書目錄編纂について

一四六

劉 斯 倫

はじめに

清末に於いて、聊城の楊氏・昭文の瞿氏・錢塘の丁氏と並び「南北四大家」と稱された大藏書家、陸心源（一八三四—一八九四）の藏書目錄の中で、唯一自ら刊行したとされる『皕宋樓藏書志』（十萬卷樓刊本、光緒八年）は、最も名高いものであるが、明治末期の書誌學者、島田翰の『皕宋樓藏書源流考』によれば、編纂當初、この書名は存在しておらず、「守先閣藏書志」と題付けられていたという。

樹藩は私に『皕宋樓藏書志』の稿本を贈呈してくれたが、その書名はまだ『守先閣藏書志』とされている。

『守先閣藏書志』という書名は、陸心源の著作集や當時の文人の記録には見えず、その詳細も今まで不明であったが、意外にもその原稿はまだ世に遺り、曲折を経て現在は國立國會圖書館所藏となっている。清末の藏書家の重鎮である、陸心源が保有していた書物の全貌を示す目錄は、明清以來の藏書史研究や清代學術交流の様子を明らかにするための資料として、非常に重要な意味を持つ。この關連資料の少ない

『守先閣藏書志』と後の『皕宋樓藏書志』とはどのような關係にあり、そして『守先閣藏書志』は何故改名されたのか、陸心源の藏書目錄編纂に於いて、『守先閣藏書志』は如何なる役割を果たしたのか。本稿はこれらの問題を含め、『守先閣藏書志』の性質を分析した上で、陸心源の目錄編纂をめぐる次の三つの問題、（一）陸氏三大藏書樓の成立時期、（二）張金吾『愛日精廬藏書志』の利用、（三）『皕宋樓藏書志』の著者、を検討、説明することを目的とする。

一、『守先閣藏書志』について

陸心源の藏書目錄の内、正式に出版されたものとしては『皕宋樓藏書志』（十萬卷樓刊本、光緒八年）、靜嘉堂文庫の所藏となった後のものとしては『靜嘉堂祕籍志』（靜嘉堂文庫、大正八年）・『靜嘉堂文庫漢籍分類目錄』（靜嘉堂文庫、昭和五年）・『靜嘉堂文庫宋元版圖錄・解題』（靜嘉堂文庫、平成四年）が挙げられる。出版物の他に、寫本の形で残っている目錄も複数存在し、中國國家圖書館所藏の『吳郡陸氏藏書目』、『歸安陸氏舊藏宋元本書目』、南京圖書館所藏の『宋元板書目』、『皕宋樓書目』等がその例である。性質上、これらの寫本目錄は殆どが、藏書

を譲渡する前に作られた点検目録に属し、日本にもこれらと類似するものとして、静嘉堂文庫所蔵の『陸氏藏書目』や早稲田大學圖書館所蔵の『陸心源藏書目』が挙げられる。

上述の点検目録とは違い、島田翰の記述によれば、『守先閣藏書志』は『皕宋樓藏書志』の原稿であり、それは島田翰自身によって日本に持ち込まれたようである。國立國會圖書館所蔵の『守先閣藏書志』には、陸心源の長男である陸樹藩による手跋及び島田翰の藏印が確認できることから、これは當時の原本に当たると考えられる。

守先閣藏書志一百二十卷 三一册 (國立國會圖書館藏、請求番號・WA 一三七)

(清) 陸心源 撰

改裝。二重裏打ちで補修しており、一重目は陸氏の原修に当たると考えられる。

青絲欄と烏絲欄(同版)二色の原稿用紙を用い、四周雙邊、每半葉一〇行行二〇字、内匡一・五×一七・〇浬。版心白口、上單黑魚尾。

卷首は「守先閣藏書志卷之一」(卷三十九から「守先閣」の三字の横に變更を示す黒い傍點あり、卷四十一・卷四十四・卷五十・卷五十四・卷五十五・卷八十四は「皕宋樓」と訂正されている。)とし、下方に朱筆で「存齋雜纂之六」と書いてある。次行に下から二字を空けて「歸安陸心源剛甫編」と記す。第三行は一字下げて「經部一」とし、第四行は二字下げて「易類一(數字は朱筆で補っている)」とする。第五行に「周易鄭康成注一卷元刊本」と書いてあり、次行に二字下げて「(宋) 浚儀王應麟伯厚甫纂輯」とあり、さら

『守先閣藏書志』と陸心源の藏書目録編纂について

に次行に同じく二字下げて本文が始まる。

全三十一册の内、第二册を除く三十册は定稿本であり、卷百二十までで、續志なし。第二册には剝がれ落ちた舊原稿の條目が集められており、最後に様本として彫られた三丁(卷三十三第一二丁・卷八十四第六丁・卷八十四第九丁。通行印本の文字と異動がある。)及び版心に「皕宋樓藏書志」とある三枚の朱摺り格子枠原稿用紙あり。

全書に互り編輯する際に切り取って竝べ替えられた條目が多い。墨筆の校補あり。特に『皕宋樓藏書志』にある、各解題の最後に附してある陸氏による案語は、當書においては往々にして墨筆により天頭に書き加えられていたり、別紙に補って貼り附けられたりしている。版下の行格についての注記は朱筆を用い、欄上の所々に「對・「低兩格寫」といった朱色の印記がある。

各册の元表紙に朱筆で「某卷校過」及び「此册刻迄」と書いてある。他に墨筆の案語が四箇所ある。

(一) 凡看出錯脫均請／加簽批明、簽稍大些、俾易／尋檢。

(第一册)

(二) 凡字外加○者、本舊所無、／須刻白文、亦張氏藏書志

／例。(第五册)

(三) 仍寄蘇／口脫頁(附箋、破れて僅か六文字が現存する。第八册)

(四) 此册本升甫發寫、因寫手極劣仍／寄／前處另寫。升甫書樣已塗抹寄／還矣。(第十八册)

一册目の副葉子に陸樹藩の識語あり。

大清歸安陸樹藩純伯氏贈／大日本島田翰君家刊先大／夫陸

心源存齋氏所著『潛園／總集』竝稿本。光緒三十一年十二月／初五日。歸安／陸樹／藩印（白文方印）字曰／純伯（朱文方印）。七冊目の副葉子に版下と刻版を擔當した人物と推定される陶升甫から陸心源宛の手紙一通が貼り附けてある。³⁾

存齋先生大人閣下、前日寄上已寫様八卷稿二／冊、諒可收覽。所云稿本、尙無餘存、均已分派／寫工、即日均可寫竣也。今寄上已寫竣七卷／竝原稿、如有校畢様本、望即擲下、粘補／發刻、餘件趕緊勿延。專此即請、／節安康定。陶升甫頓首。五月初七日。

印記・島田氏／圖書記（朱文方印）、島田翰／讀書記（白文長方印）、酒竹文庫（朱文長方印）、帝國圖書館（朱文長方印）、大正／4・4・20／購求（紫色楯圓印）

手紙の内容や陸心源の識語から見ると、『守先閣藏書志』は校正後すぐに陶升甫に渡されて寫様に用いられ、版下の底本となつた。加えて、文字内容から朱筆記號によつて指示された行款まで全てが刊本と一致するため、より嚴密に言うならば、この原稿は版下を作る前の最後の稿本、つまり『畝宋樓藏書志』の定稿本と看做して良いと言えよう。『守先閣藏書志』の定稿本である性質を把握した上で、本稿は『畝宋樓藏書志』の編纂をめぐる三つの問題を検討することを目的とする。

二、『守先閣藏書志』から見る

陸氏三大藏書樓の成立時期

陸心源の藏書が、宋元刊本を收藏する「畝宋樓」、明以降の珍しい刊本及び名人の手校手鈔本を収める「十萬卷樓」及び普通本を置く「守

先閣」との三つの部分に分かれることは藏書史上の常識として一般的に知られている。しかし、この三つの藏書樓の成立時期、特に畝宋樓と十萬卷樓との前後關係については、依然としてまだ曖昧なところが多い。

三大藏書樓の中で、成立時期が最も明確なのは潛園にある守先閣である。俞樾の「廣東高廉道陸君墓誌銘」や繆荃孫の「二品頂戴廣東高廉兵備道陸公神道碑銘」によれば、福建在任中に、勝手に鹽耗を調整したことによつて彈劾を受けた陸心源は、官を辭めて故郷に戻つて間もなく、湖州城東の蓮花莊の北に位置する朱氏廢園を購入し潛園に改築した。⁴⁾『清實錄』には、同治末年（二八七四）五月に陸心源を離職させ都に呼び戻すとの上諭が残つており、これを參考にすると、潛園を營むのは光緒の初になるはずであり守先閣を設けたのもその後であると考えられる。⁵⁾

その一方、『守先閣藏書志』に残された校訂の痕蹟は、「畝宋樓藏書志」という題名が途中から訂正されて附け加えられたことを示しており、これにより、『畝宋樓藏書志』への改名を決定したのは版下の作業に入る寸前のことであつたと容易に推測できる。だが、普通本の藏書樓の名をもつて、自らの藏書の全貌を世に傳えんと私家目錄の名稱に用いるというのは、傳統的な藏書家の性格を考えた時に、非常にそぐわない行爲であるように思われる。これらを考慮すると、『守先閣藏書志』の編纂當初、陸心源の藏書はまだ三つに分かれる状態とはなつておらず、その藏書の核となる畝宋樓も存在していなかつた可能性が非常に高い。この點については、島田翰の『畝宋樓藏書源流考』に既に言及がある。

陌宋樓と十萬卷樓はいずれも陸心源四十五歳以後にできたものと分かる。⁶⁾

これらの二樓が陸心源四十五歳（光緒四年、一八七八）以後にできたという説がどのような根據に基づいているのかは不明であるが、現行する『陌宋樓藏書志』には、光緒八年の刊記と同年十二月に作成した序文が見られ、そして刻版前の最後の作業を擔當する陶升甫の手紙にある「五月七日」を光緒八年の五月七日だとすると、その時に『陌宋樓藏書志』の版下は既に作り始められており、陌宋樓を設立し藏書志の名前をそれに因み定めたのも、當然それ以前のことであろう。ここから、「守先閣」から獨立して「陌宋樓」を設けたのは光緒八年（一八九二）の初め頃の出來事であると絞り込むことができる。

さらに島田翰は、十萬卷樓について、陸心源の門客である李宗蓮が記した『陌宋樓藏書志』序』には、陌宋樓と守先閣しか觸れられていない點から考えて、序文が完成した光緒八年除夕の時點では十萬卷樓はまだ存在していなかったはずだと指摘している。

烏戌の李宗蓮が『陌宋樓藏書志』のために序文を書いて言うには、「宋元刊本及び名人が手鈔手校したものは陌宋樓に藏し、守先閣に置いてあるのは皆明以降の刊本と普通の鈔本である」。これは陸心源がまだ十萬卷樓を構える前の状態について言っており、所藏箇所が既に二つになり、所藏の内容もそれに伴って分けられていたのである。⁷⁾

確かに、李宗蓮の序文では、通常、十萬卷樓に收藏されると認識される「名人が手抄手校したもの」が陌宋樓の分類に含まれており、「十

萬卷樓」は名前さえ出ていない。このことから推測すると、十萬卷樓の所藏は、他の二樓が成立した後に陌宋樓から分離して成立したはずであり、光緒八年の段階では陸氏には二つの藏書樓しかないという島田翰の結論にも問題がなさそうである。しかし、陸氏が刊行したもう一つの叢書である「十萬卷樓叢書」の殆どは、光緒八年以前に出版されており、『陌宋樓藏書志』の刊記も「光緒八年壬午冬月十萬卷樓藏版」となっており、いずれも島田翰の説と矛盾している。この齟齬に對して、合理的な説明を試みるものは、管見の限り、陸氏の後人に當たる徐楨基という人物の次の説のみである。徐楨基は、その著作『藏書家陸心源』の中で、陸心源は潛園よりも早くに既に「十萬卷樓」と名附けた書齋を有しており、そして潛園から貴重なものを選び出して別のところに置こうとした際に、「十萬卷樓」の名はそのまま受け継がれた、と述べている。⁸⁾徐楨基の書は、嚴密には學術的な著作とは言えない難いため、ここでは、ひとまず参考として擧げるに留めておき、今後の更なる考證を待ちたい。

結論として、光緒の初に潛園を築きその中に守先閣を作った後、光緒八年の春に陌宋樓を立て、守先閣から善本珍書をここに移し、更にそれ以降に新たに十萬卷樓を設け、陌宋樓から宋元以降の珍しい刊本及び名人の手校手鈔本や學者の原稿を選んでそこに保存した、というのが陸氏の三大藏書樓の成り立ちであると言つて良いであろう。

三、張金吾『愛日精廬藏書志』の利用について

張金吾、字は慎旃、一字月霄、昭文の人、清中期の藏書家・出版家の張海鵬の甥。藏書樓は愛日精廬といい、藏書は八萬卷に及ぶ。その藏書目録『愛日精廬藏書志』は體例が謹嚴な上、著録が完備している

ことで、清代私家藏書目錄の模範と看做されている。後世の楊紹和の『楹書隅録』や瞿鏞の『鐵琴銅劍樓藏書目錄』等の書目には、いずれも『愛日精廬藏書志』から受けた影響が垣間見える。

『甯宋樓藏書志』の編纂にあたっては、張金吾の目錄がその手本となつた。李宗蓮は序文において次のように編纂の方針を明記している。

甯宋樓所藏の舊刊本や精鈔本等の世に稀なものについて、その源流を纏め、馬貴與・朱竹垞・張月霄の目錄の體例に倣い、藏書志百二十卷を作つた。

定稿本の『守先閣藏書志』には、『愛日精廬藏書志』の具體的な版式を模倣するように指示する識語が残されている。

凡そ文字の外圍に附けてある○は、もともとなかつたもので白文に彫らなければならない。これもまた張金吾の藏書志の例である。⁽¹⁰⁾
(第五冊表紙)

さらに、中國國家圖書館所藏の、陸心源の友人凌瑕との間に交わされた通信原稿集『二家書札』には、張金吾の藏書志を意識して自らの目錄を編纂しようとする意圖が窺える記述があり、それは、呂亞非氏の『甯宋樓藏書志』的作者考實⁽¹¹⁾（淮北師範大學學報、二〇一一年四月）に指摘されている。

最近の興味は藏書志を編纂することであり、その量は張月霄のほぼ倍になる。⁽¹²⁾（光緒二年凌瑕宛）

『甯宋樓藏書志』は『愛日精廬藏書志』を参考にして編纂されたこととは疑う餘地がないが、その「参考」というのは、一體如何なる形で、

如何なる程度のものなのか、以下に見ていく。

(一) 體例の對比

『愛日精廬藏書志』の條目を構成する要素は、書名・卷數(A)、版本・舊藏(B)、選者(C)、張金吾解題(D)、前後序跋(E)、藏書題跋(F)、歴代書目の解題(G)という七類に區分できる。その最も完備した理想的なものは、左記の構成を取る。

書名・卷數(A) 版本・舊藏(B)

撰人(C)

張金吾解題(D)

前後序跋(E)

藏書題跋(F)

歴代書目解題(G)

(例)

說文解字補義十二卷(A) 元刊本(B)

(元) 包希魯撰(C)

希魯字魯伯、進賢人。學問該博、操行高潔；且予之不敢自祕正

予之寶愛是書也。(D)

(上闕) 問適除兵燹、既無文字可考、復寡師友相資；至正乙未

冬十一月長至包希魯序。(E)

一方、『甯宋樓藏書志』の條目も、理想的なものは張金吾と同様の七つの要素によって構成されている。

書名・卷數(A) 版本・舊藏(B)

撰人(C)

前後序跋 (E)

歷代書目解題 (張金吾解題を含む) (G)

藏書題跋 (F)

陸心源案語 (D)

(例)

說文解字補義十二卷 (A) 明初刊本、張月霄舊藏 (B)

(元) 包希魯撰 (C)

(上闕) 間適除兵燹、既無文字可考、復寡師友相資：至正乙未

冬十一月長至包希魯序。(E)

《學經室外集》・說文解字補義十二卷、元包希魯撰。按：

張氏金吾曰：希魯字魯伯、進賢人。學問該博、操行高潔：且予

之不敢自祕正予之寶愛是書也。(G)

案此永樂刊本、前有永樂年序：(D)

ここで例として挙げた二つの藏書志の『說文解字補義』條目からも分かるように、二書の條目はほぼ同じ構成をもっており、張金吾の解題が「歷代書目の解題 (G)」として移しかえられた以外、『皕宋樓藏書志』における唯一の發明は、陸氏自らの案語を條目の最後に付け加えたことにある。しかし實際は、『愛日精廬藏書志』にしても、『皕宋樓藏書志』にしても、著者の案語が附されているものは少數に限られる。そこで案語のない例を見ていくことにしたい。

(『愛日精廬藏書志』例)

書苑菁華二十卷 (A) 舊

抄本 (B)

(『皕宋樓藏書志』例)

書苑菁華二十卷 (A) 明

抄本 (B)

(宋) 錢塘陳思纂次 (C)

(宋) 錢塘陳思纂次 (C)

『守先閣藏書志』と陸心源の藏書目録編纂について

古以書爲名：鶴山翁題。

(E)

古以書爲名：鶴山翁題。

(E)

これらには、ともに案語がなく、故に構成が同じで異なるところがない。『皕宋樓藏書志』は手本とする『愛日精廬藏書志』の體例をそのままに利用しており、そしてこの條の主要内容は序文を抄録するに過ぎない以上、二書が完全に合致するのは當然のことであると思われる。だが一方で、靜嘉堂文庫に現存する、陸心源舊藏の『書苑菁華』の原本(一一函一四二架)の中には鶴山翁の序文は見当たらない。これは『皕宋樓藏書志』の著録が、原書に忠實であるとは限らないことを意味する。ここで類似の例をもう一つ挙げる。

(『愛日精廬藏書志』例)

政和御製冠禮十卷五禮新儀

二百二十卷 (A) 舊抄本 (B)

(宋) 鄭居中等撰 (C)

前有御筆指揮及尙書省議禮

院累次所上劄子：(D)

御製序曰：禮緣人情而爲之

節文。：政和新元三月一日序。

尙書省牒議禮院知樞密院事

鄭居中等劄子奏。：故牒。

政和三年四月二十九日牒。

(E)

(『皕宋樓藏書志』例)

政和御製冠禮十卷五禮新儀

二百二十卷 (A) 舊抄本、

曝書亭舊藏 (B)

(宋) 鄭居中等撰 (C)

前有御筆指揮及尙書省議禮

院累次所上劄子：(G)

御製序曰：禮緣人情而爲之

節文。：政和新元三月一日序。

尙書省牒議禮院知樞密院事

鄭居中等劄子奏。：故牒。

政和三年四月二十九日牒。

(E)

これも同様に二藏書志で、書誌情報が完全に一致する例であるが、実際には陸心源舊藏本（二〇函―二二架）は『御製冠禮』十巻と御製序をとともに缺いている。

以上の例から、『甌宋樓藏書志』は實際に收藏する原書の状態よりも、『愛日精廬藏書志』を模倣することを優先させたと考えられる。

(二) 引用から生じた誤り

以上に見た原書には無い序文を條目の中に含めていることは、著録の詳しさを求める意欲から生じたものに過ぎないかもしれないが、『愛日精廬藏書志』からの襲用によつて發生したと思われる版本の誤りも『甌宋樓藏書志』には多く存在する。その内、二例を示す。

〔『愛日精廬藏書志』例〕

鄂公金佗粹編二十八卷續編
三十卷 (A) 元刊本 (B)

(宋) 奉議郎權發遣嘉興軍

府兼管内勤農事岳珂編進 (C)

…至正二十三年三月甲子左

右司郎中臨海陳基序。

…嘉定著雍攝提格歲橘涂初

吉珂謹序。

…嗣歲孟陬之月癸丑朔珂後

序。

…會稽戴洙序。

…紹定改元歲重九日珂謹

序。(E)

〔『甌宋樓藏書志』例〕

鄂公金佗粹編二十八卷續編
三十卷 (A) 元刊本 (B)

(宋) 奉議郎權發遣嘉興軍

府兼管内勤農事岳珂編進 (C)

…至正二十三年三月甲子左

右司郎中臨海陳基序。

…嘉定著雍攝提格歲橘涂初

吉珂謹序。

…嗣歲孟陬之月癸丑朔珂後

序。

…會稽戴洙序。

…紹定改元歲重九日珂謹

序。(E)

ここで元刊本として著録されている『鄂公金佗粹編』であるが、筆者が調査した結果、陸心源が持っていたものは實は明嘉靖の版（九函―三五架）であつた。宋元の舊い序文の他に、嘉靖壬寅張鏊・嘉靖戊午黃日敬・嘉靖壬寅洪富の三つの序及び嘉靖二十一年に浙江巡按御史唐臣が書いた祭文が収録されているにもかかわらず、目錄には載せていない。

〔『愛日精廬藏書志』例〕

孔子集語二卷 (A) 抄本
(B)

(宋) 永嘉薛據纂 (C)

淳祐丙午孟夏庚申朔永嘉薛

據叔容父序。

中書省看詳所進孔子集語

狀。(E)

〔『甌宋樓藏書志』例〕

孔子集語二卷 (A) 抄本
(B)

(宋) 永嘉薛據纂 (C)

淳祐丙午孟夏庚申朔永嘉薛

據叔容父序。

中書省看詳所進孔子集語

狀。(E)

清朝藏書家の通例からすると、「明鈔本」または、「影宋鈔本」と強調せず、「抄本」とのみ記載している場合、それは普通の「清抄本」を指すのが一般的である。張金吾藏の『孔子集語』も清抄本である可能性が高く、その著録内容から底本や文獻價值を判斷することができない。一方、陸心源は『孔子集語』版本の中では、現存する最も古く、價值が高いとされる明嘉靖間范欽刊本（二〇函―五五架）を所藏していた。

先人と競い合つて自分が持っているものを品級が一つ上の版として著録するのが、藏書家の悪い癖と言えるが、より優れた版本を有しているにもかかわらず、『愛日精廬藏書志』の記載に従つて記載するのは、

非常に不可解と言わざるを得ない。加えて、『皕宋樓藏書志』においては、こういった状況は稀ではない。だとすると、筋の通った解釋として、こうした誤りは『愛日精廬藏書志』を直接に寫したことによつて生じたものだという結論に辿り着く。

定稿本に見える、條目を切り取つて並べ替えた痕蹟や、ここまでの考察から、『皕宋樓藏書志』の『愛日精廬藏書志』に對する態度は、體例を參考にしたと言うより、事實上『愛日精廬藏書志』の内容に補足を加えて再編集し完成させたという方が本來の様子に近いであろう。

そして、『守先閣藏書志』において、陸心源による案語が解題の最後に墨筆で補われているという點からみると、目錄編纂當初、陸氏は案語を附けずにただ『愛日精廬藏書志』を増訂するという方針を取ろうとしていた可能性もなくはない。

四、『皕宋樓藏書志』の著者に對する再考察

『皕宋樓藏書志』の事實上の撰者については、從來、島田翰による説を承け、陸心源の代わりに、實は門客の李宗蓮が著したという説が主流になっている。

『校補』と『藏書志』は門客の李宗蓮によつて著され、『題跋』と『文集』にも恐らく底本がある。且つ、考證を誤つたところも多い(『皕宋樓藏書源流考』¹⁰⁾)。

島田翰の「李宗蓮説」は、『皕宋樓藏書志』序」に由來する。

(陸心源)先生は三尺ほどの厚さもある原稿を出して異同を明ら

『守先閣藏書志』と陸心源の藏書目錄編纂について

かにするように言いつけた。そこで私は整理や編輯・謄寫の作業に着手し、三ヶ月校訂に携わり、更に七ヶ月して、ようやく出版することができた。¹¹⁾

一方、近年の陸心源に對する再評價に伴い、『皕宋樓藏書志』はやはり陸心源本人によつて作られたという聲も高まっている。この説の支持者が、「李宗蓮説」に對する反論の根據として投げ掛ける疑義は次の三點である。

(一) 李氏の序には校勘・編輯の仕事を委ねられたとしか觸れていない。それを、李宗蓮が『皕宋樓藏書志』を著したと捉えることはできないのではないか。

(二) 百二十巻もある書目が僅か三ヶ月の間に完成できるものなのか。

(三) 新たに發見された中國國家圖書館所藏の『二家書札』によると、陸心源は光緒二年(一八七六)には既に目錄の編纂に言及している。¹²⁾

これら三つの反論にはそれぞれ根據があり、「李宗蓮説」は過去のものとなりつつあるが、『守先閣藏書志』と結びつけてこれらの問題を再び考察すると、新しい手掛かりがみえてくる。

1. 『皕宋樓藏書志』の書誌と案語

既に引用した李宗蓮の序文は、光緒八年の除夕に書かれたものである。『守先閣藏書志』の七冊目の副葉子に、陶升甫という人物から陸心源宛に送られた手紙が貼り附けてあるのだが、それは、仕事の進捗状況を報告するために、光緒八年の五月に書かれたものである。五月に寫様が既に始まっているとすると、十二月まではちょうど約七か月

であり、出版するには七ヶ月間がかかったという李宗蓮の序文にある記述と一致する。このように見ると、序文にある、「三ヶ月間編纂に携わった」という記録も、正確なものである可能性が高くなってくる。しかし、これでは、百二十巻もある書目が僅か三ヶ月の間に完成できるかという疑問にはまだ答えられていない。

定稿本から分かったように、『甬宋樓藏書志』における陸心源の案語は、出版する直前に付け加えられたものであり、それ以外の書誌とは互いに獨立して作られたと推測される。そして既に論じたように、案語を除く書誌の部分はそのまま『愛日精廬藏書志』を引用していることが多い。條目の整理や並べ直しの作業だけであれば、三ヶ月で成し遂げるのも不可能ではなく、李宗蓮の言う校勘・編輯の仕事とは違うものかもしれない。

一方、案語こそは書物に対する見解を示しこの目録の独自の學術價値を決める重要な部分である。いくら分量が少ないとは言え、三ヶ月の間に、案語を完成させることは、基本的な書誌情報の編輯を終えることよりも、遙かに困難であろう。

陸心源の案語には、「詳しくは『儀顧堂集』を参考」との文言が屢々見られ、考證・校勘の内容もこの文集にその裏付けがあることが多い。『儀顧堂集』は、陸心源が中年の頃から編纂を開始したもので、數回の増訂を経て、現在八巻本・十二巻本・十六巻本・二十巻本の四つの版本が残されている。そして、その中の題跋類の文章の殆どは、同治十年（一八七二）から十三年（一八七四）の間に刊刻された十二巻本・十六巻本に至って初めて收められたもので、時間的には、『甬宋樓藏書志』が完成した光緒八年（一八八二）よりも早い。光緒二年（一八七六）、陸心源はすでに藏書志の編纂に着手していたという事實に矛盾

しない。これらのことから、『甬宋樓藏書志』の案語は、陸心源が長年に亙り蓄積してきた成果と看做して良いと考えられる。

2. 陸心源題跋と『甬宋樓藏書志』との矛盾について

陸心源の讀書・校書の心得は『儀顧堂題跋』に集中している。しかし、その中に『甬宋樓藏書志』と矛盾する點は少なくない。ここでもう一度、『愛日精廬藏書志』と『甬宋樓藏書志』を比較する。

（『愛日精廬藏書志』例）

輿地紀勝二百卷（A） 影寫宋刊本 從錢塘何氏藏宋刊本影寫（B）

（宋）東陽王象之編（C）

…此本從宋雕本影寫、闕卷十三至十六、卷五十一至五十四、卷一百三十五至一百四十四、二百六十八至一百七十三、一百九十三至二百、共闕三十二卷。（D）

…嘉定辛巳孟夏東陽王象之謹序。

…寶慶丁亥季秋三日眉山李直序。

□鳳□□誨墨示所著紀勝之書□拜涵讀：七月日朝請大夫直寶章閣□□制□□□事

（『甬宋樓藏書志』例）

輿地紀勝二百卷（A） 影寫宋刊本 從錢塘何氏藏宋刊本影寫（B）

（宋）東陽王象之編 闕三十二卷（C）

王象之序（嘉定辛巳）。

李直序。

□鳳劄子。

李直序。（E）

直齋書錄解題曰：

張氏金吾曰：…此本從宋雕本影寫、闕卷十三至十六、卷五十一至五十四、卷一百三十五至一百四十四、一百六十八至一百七十三、一百九十三至二百、共闕三十二卷。（G）

同知洪州□□□□曾□鳳劄子。(E)

直齋書錄解曰：(G)

：嘉慶壬戌中冬竹汀居士錢

大昕書。(F)

陸心源が持っていた『輿地紀勝』(九函一五五架)は、張金吾舊藏の原書ではないが、この條は明らかに『愛日精廬藏書志』に由来している。だが、『儀顧堂續跋』卷八の「影宋鈔輿地紀勝跋」には次のように書かれている。

：卷十三至十六・卷五十五至五十四・卷一百三十六至一百四十四・卷一百六十八至一百七十三・一卷百九十三至二百を闕く：曾治鳳の劄子は治鳳の草書手迹に從つて勾摹して上梓された。その官銜は「朝奉大夫直寶章閣江西置制新除直煥章閣知廣州廣東經略」のほずである。張月霄の藏書志には、劄首の「治」の字、「鳳」の下にある「伏被」の二字・「拜」の上の「再」の字は皆空白の梓とされており、「拜」の下の一文字は辨別できず、誤つて「涵」と解釋している：「直寶章閣」以下は誤つて「□□□制□□□□事同知洪州□□□曾□鳳」とする。張金吾が見た抄本は精確なものではないであろう。

この跋文を見れば、陸心源は自分の藏本と張金吾本との違いをよく知っており、且つ、自分のものは闕字が少なく、張金吾のものより優れていると自覺していたことが分かる。もし、『甌宋樓藏書志』が案語から書誌まで全て陸心源本人によつて作られたとすれば、このよう

な矛盾は現れないであろう。同様の例として『劉向說苑』が擧げられる。この本は『儀顧堂題跋』において「明楚府大字本」とされ、靜嘉堂文庫に現存する原書(一〇函一四九架)と一致するが、『甌宋樓藏書志』になると、その著録は『愛日精廬藏書志』のまま「元刊本」となっている。

このような『甌宋樓藏書志』の著録と矛盾する見解は陸心源の題跋に散見している。このことはまた『甌宋樓藏書志』の案語と書誌が異なる人物によつて作成されたことの傍證になると思われる。推察するに、『甌宋樓藏書志』の著者に關しては、案語は陸心源自身の著述であり、基本的な書誌情報は李宗蓮を始めとする門下の人物が張金吾『愛日精廬藏書志』を元にして増訂を加えて再編集したというように理解するのが最も妥當であろう。

終わりに

定稿本である『守先閣藏書志』の考察を通して、本稿は陸心源の目錄編纂をめぐる三つの問題、(一)陸氏三大藏書樓の成立時期、(二)張金吾『愛日精廬藏書志』の利用、(三)『甌宋樓藏書志』の著者について再検討をした。その結論は次の通りである。

一、『甌宋樓藏書志』を作り始めた時點に於いて、陸氏には「守先閣」という藏書樓しかなく、故にその藏書志は「守先閣藏書志」と名付けられた。その後、版下を作る寸前に「甌宋樓」ができ、藏書志もそれに因んで改名された。「十萬卷樓」に至つては、更にそれ以降に設立されたと推測される。

二、『甌宋樓藏書志』では、張金吾『愛日精廬藏書志』をそのまま引用している書誌情報が多く、その程度は「参考」の範疇を遙かに超

えている。従つて、陸心源所藏の實物と目録の記載に齟齬が見られる。三、『甬宋樓藏書志』では、案語と書誌は異なる人物によつて作成された可能性が高い。即ち案語は陸心源自身によつて完成し、定稿本がほぼできたところに附け加えられた。一方、基本的な書誌情報は李宗蓮を始めとする門下の者が張金吾『愛日精廬藏書志』を元にして増訂を加えて再編集したと考えられる。

陸心源が亡くなつた後、子孫は藏書を保持することができず、その舊藏は田中青山・重野成齋等の斡旋を経て光緒三十三年（一九〇七）に銀元十萬兩で三菱財閥の岩崎氏に譲られることとなる。^①甬宋樓藏書が國を去ることは、當時中國の學界に非常に大きな衝撃を與え、その餘波は今なお残つてゐる。

中國に於ける陸心源及びその藏書に關する研究では、原書を見ることのできないという現状から、目録を利用して藏書の構成を統計的に分析する研究手法がとられることが多い。しかし、これまで本稿で示してきたように、『甬宋樓藏書志』の著録と實物との間には、少なからぬ違いが存在する。このことから、『甬宋樓藏書志』を利用する際には、結論の正確さに影響を與えないためにも、常にその特質に注意を拂ふ必要がある。また、これまでの藏書志を基にした陸心源の藏書構成に關する研究についても、この點を踏まえた上で、再検討する餘地があると考ええる。

注

(一) 楊瞿陸丁四家のことを、今日の人は「清末四大藏書家」、または彼らの藏書樓について「清末四大藏書樓」と稱するが、繆荃孫の『善本書室藏書志』序（「近海内稱藏書家、曰海源閣楊氏、曰鐵琴銅劍樓瞿氏、

曰甬宋樓陸氏、與八千卷樓爲南北四大家。」光緒二十六年刊本）や、島田翰「清四大藏書家記略」（黃氏（丕烈）之書、一散而歸於汪闓源藝芸書舍、再佚而分歸於常熟瞿氏、聊城楊氏、而其一分則收在歸安陸氏、稱南北三大家、配之以錢塘丁氏、又稱四大家矣……四氏之藏、士子汎稱爲南北四大家。」訪餘錄」、田中慶太郎排印本、大正一〇年）によると、「南北四大家」という呼稱のほうが當時では一般的であつた。他に「海内四大藏書」と稱されたこともあるという（「近有聊城楊紹和海源閣『楹書偶錄』、常熟瞿鏞『鐵琴銅劍樓書目』、仁和丁丙『善本書室藏書志』、歸安陸心源『甬宋樓藏書志』、所謂海内四大藏書家者。」葉德輝「藏書十約」、觀古堂所著書、光緒至民國間湘潭葉氏刊本）。いずれにしても、「清末四大藏書家」と呼ばれるようになったのは、最近のことであろう。

(二) 「而樹藩贈予以『甬宋樓藏書志』稿本、其書尙作『守先閣藏書志』。」島田翰『甬宋樓藏書源流考』不分卷（武進董氏京師刊本、光緒三十三年）

(三) 陶升甫という名は、同じく『潛園總集』に收められる『群書校補』の定稿本（都立中央圖書館所藏）にも出ており、『十萬卷樓叢書』本の『續考古圖』の卷末にまた「蘇城陶升甫摹刻」との七文字が彫つてある。恐らく、陸心源の出版事業において、寫様・刻版の作業は皆彼に任せていた。

(四) 潛園購入の経緯に關しては、俞樾「廣東高廉道陸君墓誌銘」（『春在堂雜文六編』、『春在堂全書』本）と繆荃孫「二品頂戴廣東高廉兵備道陸公神道碑銘」（『續碑傳集』、周駿富編『清代傳記叢刊』、臺北明文書局、一九八七）に詳しい記載がある。

(五) 「著即開署缺、遵前旨仍送部引見。」『穆宗實錄』（『清實錄』、中華書局、一九八七）第五十一冊第八五五頁。また、『德宗實錄』（『清實錄』、中華書局、一九八七）第五十二冊四八〇頁に光緒二年閏五月己卯の上諭

があり、陸心源は鹽耗の規定を改竄したため、免職されることになったと記されている。（「擅改票鹽章程、徇私專擅、著照部議、卽行革職。」）俞樾が書いた墓誌銘によると、免職された時、陸心源は既に故郷に歸つて二年が経っていた。

(6) 「乃知甯宋・十萬皆心源四十五歲以後所名也。」

(7) 「烏戌（戌）李少青宗蓮序『甯宋樓藏書志』云：「宋元刊及名人手鈔手校者儲之甯宋樓中、若守先閣則皆明以後刊及尋常鈔帙。」是宗蓮就心源未構十萬卷樓以前而言、已分爲二、書亦隨之判矣。」

(8) 徐楨基『藏書家陸心源』（陝西人民教育出版社、二〇〇七）第三八頁。

(9) 「而以甯宋寶藏舊刻精鈔爲世所罕見者、輯其源委、仿貴與馬氏・竹垞朱氏・月霄張氏例成藏書志一百二十卷。」

(10) 原文は第一章を参照。

(11) 「近編『藏書志』亦有致、約比張月霄加倍。」呂亞非『甯宋樓藏書志』的作者考實（淮北師範大學學報、二〇一一年四月）参照。

(12) 『校補』・『藏書志』爲其客李宗蓮所撰、『題跋』・『文集』亦多藍本、且失攷不一而足。」

(13) 「先生則出巨藁三尺許、屬爲參定同異、乃繕緝疏錄、從事黃墨者三閱月、又七閱月而梓成。」

(14) 注(1)を参照。

(15) 「……缺卷十三至十六・卷五十五至五十四・卷一百三十六至一百四十四・卷一百六十八至一百七十三・一卷百九十三至二百……曾治鳳劄子系照治鳳草書手迹勾摹上版、其官銜爲「朝奉大夫直寶章閣江西置制新除直煥章閣知廣州廣東經略」。張月霄藏書志劄首「治」字・「鳳」下「伏被」二字・「拜」上「再」字皆作空圍。「拜」下一字不辨、誤釋作「涵」……「直寶章閣」下誤作「□□□制□□□事同知洪州□□□曾□鳳」、想所見抄本不精耳。」陸心源『儀顧堂題跋』十六卷『續跋』十六卷（清光緒十

六歸安陸氏刊本、續跋十八年刊）。

(16) 『儀顧堂題跋』卷六「說苑跋」。

(17) 靜嘉堂文庫員「靜嘉堂文庫にて清國湖州歸安の陸氏心源舊藏の書を購入せし顛末」（『圖書館雜誌』第三號、一九〇八年）を参照。